

学びの場における音楽活動 「密」をさける難しさをどう乗り越えるか

小塩さとみ おしおさとみ / 宮城教育大学、AA研共同研究員

コロナウイルスの感染拡大は、学びの場である小中学校や高校・大学での音楽活動にも大きな影響を与えている。その実態はさまざまであるが、宮城県の教員養成大学で音楽学を教えている筆者の体験と、教え子の教員約20名にオンラインで実施したインタビューの聞き取り内容をもとに、教える側の葛藤を報告する。

「みんなで演奏」は危ないこと！？

2020年2月末に翌月からの小中学校一斉休業要請が発表されると学校の環境は一変した。卒業式や終業式は縮小あるいは中止となり、遅れて始まった新年度の授業は、道具の共有やグループ活動を避けて実施された。文部科学省からは「リスクの高い学習活動は行わない」という指示があり、音楽の授業では、歌と鍵盤ハーモニカやリコーダーなど息を使う楽器の演奏が「高リスク」とみなされた。学校再開後もしばらくは音楽の授業を行わず、他の教科を優先した学校も多かった。通常ならば新年度の音楽の授業は歌から始まり、新入生は校歌を歌い覚えていく。みんなで歌うことは音楽の学習の基本であり、同時に一緒に学ぶ仲間との関係を作る行為でもあった。しかしコロナ状況下で、音楽は「危険な」「こわい」活動になってしまった。

地域や学校により状況は異なるが、2020年度の音楽の授業は、「音楽鑑賞」や「音楽づくり（創作）」を中心に行った学校

が多かった。タブレット端末を利用すれば、学校で推進が求められているICT機器の活用にもつながるので、この機会に初めてタブレット授業に取り組んだ先生も多く、講習会も多数開催された。授業中にタブレットで各自が音楽を聴いたり作曲アプリで曲を作ったりする様子は、演奏会やライブがすべて中止となり家の中で音楽を聴くしかない大人と似たところがあるかもしれない。

オンラインでもできること・できないこと

大学も2020年度は大半が遠隔授業で始まった。筆者の勤務校では5月の連休明けにすべての授業を遠隔で実施する形で前期授業が始まった。講義科目は、担当教員が動画を作成して配信するか、ZoomやGoogle Meetなどインターネット会議システムを利用すれば、通常とほぼ同じ内容の授業を遠隔で行うことができる。しかし音楽実技を遠隔で教えることはできるのか。これは音楽大学や教員養成大学の音

楽科の教員が直面した課題であった。

筆者の担当授業の大半は講義科目だが、小学校の教員免許取得に必要な科目「小専音楽」ではピアノの実技を教えている。例年は教室に受講生が集まり、1人ずつ宿題の曲をピアノで弾く。教員は学生の演奏にアドバイスをを行い、次の宿題の模範演奏と練習上の注意点を説明する。教室にはピアノがあり、受講生は大学の音楽棟の練習室のピアノを使って練習ができた。しかし遠隔授業では大学の楽器は使えない。家にピアノやキーボードがない人が数名、楽器はあるが「音出し禁止」でヘッドホンを外せないという人もいた。心配しながら授業準備を開始したが、最終的には、教室での授業とほぼ同じ流れで授業を行う方法が見つかった。宿題の説明動画を作成して配信し、受講生はそれを見て自宅で練習し、Zoom授業で宿題を弾くという流れである。Zoom授業は3人1組で15分ずつ、楽器が家にない人は紙鍵盤の上で手を動かしてもらった。



ピアノの弾き方を動画で説明する時にも紙鍵盤を使用（「小専音楽」のための動画より）。

*記載のない写真はすべて筆者撮影。



「民族音楽演習（ガムラン）」の授業風景（2021年9月）。インドネシアのガムランの集中講義。楽器も人も距離を確保しながら授業を行った。前後左右の距離を確保して二部制で実施。



「声楽アンサンブル」前期最終日の公開演奏（2020年8月）。緊張した場での演奏経験が音楽の上達には欠かせない。



学内演奏会（2021年2月）。「弦楽」の授業発表。演者間の距離を確保して演奏した。

最終試験の代わりにコロナ前と同じ課題曲の演奏動画を提出してもらい、前期の「小専音楽」は終了した。遠隔でも何とかできた、けれども遠隔では教えられないこともあったというのが実感だ。「何とかできた」のは初心者クラスだったことが大きい。楽譜通りに弾いているか、指づかいは適切かなど、基礎的な確認ができればアドバイスが可能だった。加えて、受講生の頑張りも大きかった。自宅で過ごす時間が長く、練習時間がとりやすかったのかもしれない。授業後のアンケートではピアノを弾けるようになったことを喜ぶ声が多数聞かれた。しかし、「同じ空間にいる他の人に向けて音を出す」「失敗を恐れずに一度きりの音楽を奏でる」という体験の場を作れなかったことは、教える側としては残念であった。15回の授業のうち2回だけ全員がZoomで集まり他の人の前で演奏する機会を設定したが、同じ空間に人がいる緊張感や高揚感が作れないものかしらがあった。

「対面で音楽をする」ことの意味

勤務校では、専門の実技科目は7月から対面授業が認められた。8月に「声楽アンサンブル」の担当の先生から、前期最後の授業を公開演奏の形で行うと案内をもらい、筆者も教室に演奏を聴きに行った。受講生は歌う直前までマスクをつけ、聴き手は相互に十分な距離をとって座る小さな演奏会だったが、同じ空間で演者や他の聴き手と音の響きを共有して音楽を聴く素晴らしさを実感した。2020年度の後期からは、筆者の勤務校では少人数の授業は講義も含めて対面で実施可能となった。箏を学ぶ「和楽器」やインドネシアのガムランを学ぶ「民族音楽演習」のように大学の楽器を使って行う授業や、「合唱」や「吹奏楽」の

ように大勢と一緒に演奏する音楽を学ぶ授業も多く、対面授業が再開することで音楽の学びの場が戻って来たと感じた。

授業に関しては大学の方針により対面での実施が早期に実現したが、大学行事の開催はまた別の難しさがあった。毎年2月に音楽科の学生と教員が合同で企画・実施する演奏会は、入念な感染対策を講じて行ったが、こまめな消毒や換気、舞台裏の出演者の動線把握、スタッフの人数制限、客席のどこに誰が座ったかの情報管理など、通常とは異なる運営上の苦労が多かった。この苦労を演奏機会の確保に必要なことから積極的に受け入れようとする人と、授業外で演奏を行う時期ではないと考える人が衝突するなど、演奏会の開催をめぐる人間関係がぎくしゃくした。

小中学校でも学校行事の運営は同様の難しさを抱えていたと思われる。小学校の学習発表会、中学校の合唱コンクール、卒業式での奏楽など、音楽と関わりが深い学校行事は多数ある。行事を通して児童生徒が学ぶことは多いが、人が集まれば感染リスクは高くなる。この折り合いをどうつけるかは難しい課題である。市町村の教育委員会が提示したガイドラインに基づき、各学校は授業や行事の実施ガイドラインを作って、実施を判断する。2020年度は行事を最小限に抑え、学習発表会や合唱コンクールなどを中止した学校が多かった。一方で、発表内容を音楽以外に変更したり、ボディパーカッションなど感染リスクが低い音楽活動を工夫したりして学習発表会を実施した学校もあった。合唱コンクールも、学年ごとに分割開催した学校、学校の近くの屋外施設を借りて全校生徒が距離をとって歌える場を確保した学校など、対応はさまざまであった。近隣地域の学校でも、どの行事を実施し、どの行事を中止するかの判



学内演奏会（2021年2月）。客席は前後左右を空席にした「格子状」の配置とした。

断が異なった例は少なくない。学校により、生徒の音楽体験に差が生じた。

長引くコロナ状況下で

社会が「脱コロナ」の方策を探っているのと同様に、学校の諸活動をコロナ前の状況に戻す模索が始まっている。コロナ対応3年目の2022年度は、感染防止に気をつけながら、以前と同じ行事を同じ時期に行うようになった学校が多いが、感染防止対策には多くの時間と労力を必要とする。授業での歌はマスクをつけて歌えるようになった学校が多いが、大きな声を出して歌う感覚を忘れてしまった人も多く、またマスクを外さないで演奏できないリコーダーに関しては今年度も授業では取り扱わない学校もあると聞く。コロナ自粛の年の新入生はすでに3年生となったが、まだ校歌を一度も声を出して歌ったことがない児童や生徒は多い。コロナの影響は大きい。

音楽の授業では自分の体を使って音を出し表現することを学び、他の人と一緒に同じ音楽を聴く体験をする。そして学校行事では、他のクラスや保護者に対して、演奏発表をすることで音楽表現の経験を積む。他の人と一緒に演奏する爽快感や空間に響く音を楽しむ体験をいかに取り戻すことができるのか、学校現場の取り組みを引き続き注視していきたい。

